



TITLE:

我が國の東方學とペリオ教授

AUTHOR(S):

羽田, 亨

CITATION:

羽田, 亨. 我が國の東方學とペリオ教授. 東洋史研究 1948, 10(3): 186-197

ISSUE DATE:

1948-07-15

URL:

<https://doi.org/10.14989/138887>

RIGHT:

我が國の東方學とペリオ教授

羽 田 亨

前の世界大戦中及び戦後暫くの間に、歐洲諸國に於て多數の學者の物故したことは御承知のとほりでありますが、それらの中には直接戦争に参加して陣歿した人もあると共に、我が國の現情に似通うた榮養失調の状態で亡くなった人も少くないのであつて、しみじみ戦争の慘禍を味はつた次第であります。この度の戦前戦後に於てもまた諸國の多くの學者が同じやうな事情の下に亡くなつたやうでありますが、就中フランスの東方學界に於ては、グラネー、マスペロ、アツカン等有名の人々が相ついで鬼籍に入つた中に、我が國に多くの知己友人をもつてゐた偉大なる東方學者ポール・ペリオ (Paul Pelliot) 教授をも數へねばならぬことは誠に痛恨の至りであります。ペリオ教授の亡くなつた噂は昨年來傳聞してゐましたが、近頃になつて漸く

その確報に接した次第であります。彼が現代フランスの生み出した東方學の偉材であり、獨りフランスとかヨーロッパとか言はず、世界の東方學界の最高峰に立つてゐたことは、學界の等しく認めてゐたところであります。尤も一概に東方學と言つても廣い範圍に亘る名稱で、その中に多くの分野を區別しなければならぬ譯であります。氏の分野は極東・中央亞細亞を含めての言語・歴史・考古の諸學に互つてゐたのでありまして、かゝる範圍に於てペリオ教授を最高峰の一人に推すのに、何人も異論のないことゝ信じます。フランスの地理學會の會報 *Annuaire de la Société Géographique* 一九四五年一〇月―十二月號に、同會長ペリエ氏のペリオ教授に對する追悼の辭が載せられてあるのを、東京の石田幹之助教授から送つて貰つたのであ

りますが、その中に「吾々は彼が學界及びフランスの至寶として、なほ永く健在することを期待してゐた」こと「彼がフランス東方學界の最も光輝ある代表者であつた」こと「マスベロ、グラネー等がベリオよりも年若くして然も先立つて永眠した」ことなどを述べて、深い哀悼の意を表して居ります。これによつても如何に彼がフランス東方學界の第一人者として尊敬せられてゐたかを知るに足ると思ひます。今日我が財團法人東方學術協會京都支部の第一回講演會に於て、かゝる題目の下に一場の講演を試みますことは、かゝる巨匠の永眠を哀悼致しますと共に、氏が我が東方學界との間に誼が深く、絶えずその成績を世界に紹介し、我が學界をして世界に重きを致さしめた上に寄與するところ甚大であつたことを追念して、感謝の意を併せて表したいと思ふが爲であります。

先づその略歴を述べますと、その家は元來ノルマンディの出身でありますが、彼自身は一八七八年即ち明治十一年にパリで生れ、二十一歳で印度支那の考古學調査員となり、一九〇〇年にハノイのフランス極東學

院 L'École Française d'Extrême-Orient が設立せられるとその研究員になり、翌年には北京に在つて拳匪事件に遭遇し、公使館區域の防禦に武勇傳を残し、その功によつて若年ながらレジオン・ド・ヌール十字章を受けました。ついで極東學院紀要 Bulletin de l'École Française d'Extrême-Orient の編輯に参加し、中國の歴史及び書籍の解題に關する初期時代の述作を續々發表して、中國研究家としての博識を認められることになりましたが、急に名聲を博するやうになつたのは、中央亞細亞の探檢に従事してからのことでありました。一九〇六年六月にパリを出發し、ロシアを徑てトルキスタンに入り、一九〇七年即ち明治四十年十二月に有名なる敦煌の千佛洞を調査して、古書古記録古畫の類を鑒別選擇し、その幾千卷を獲て引上げたのであります。今日パリの國立圖書館やギメー博物館に收藏してあるのがそれであります。一九一一年 Collège de France に開かれた中央亞細亞の言語歴史考古學講座擔任の教授となり、一九一四—一九一八年の戰時中には豫備士官として初めはダーダネルに勤め、ついで北

京公使館付き陸軍武官となり、本務の傍中國及び蒙古の研究に精進し、一九二〇年には學士院會員 *Membre de l'Institut* に擧げられ、一九三一年には文藝院 *l'Academie des Inscriptions et Belles-Lettres* に迎へられました。數へ年五十四歳の若さでこの老儒林の間に伍することになつたのは誠に異數のことであります。一九三五年には亞細亞學會 *la Société Asiatique* の會長、また地理學會副會長に選ばれ、別に有名な東方學雜誌通報を一九二一年以來コルディエ氏と共に編輯し、コルディエの歿後一九二五年以降はこれを主宰して來ました。(一九三六年以降は Duyvendak 氏と共に編)。この間歐米諸國の大學や學會に招かれて講義や講演に従事したこと、一々列學し難い程頻繁で、今これら諸國の東方學を修めるものは、どこかでその講義を聽かなかつたものは少いというても殆んど誤らないであらうと思います。我が國には昭和十年一九三五年に來遊し、この京都には六月二十日から二十五日まで滞在し、出發當日の多忙な時間を繰合せて、曾てパリで交を結んだ内藤博士の一周忌の法要に參詣して追悼の

意を表したこともありましたが。一昨一九四五年アメリカのハーバード大學で講義してフランスに歸つた後、二ヶ月許り病床に在つて、その十月二十八日パリで永眠したとのことであります。以上は前述のペリエ氏の追悼の辭に基づいて私の知るところを附け加へ、極めて簡単にその経歴を述べたのであります。

その著述は非常に多くてこゝに一々枚舉することは困難であります。一九二七年までの重なる述作が一九三四年の *Bibliography Buddhique* の第四—五號に約百種ほど載せてあります。その後雜誌通報・亞細亞學會雜誌・極東學院紀要等を始め、内外の東方學術雜誌に載せられたものが多數ありますが、その主要のものは大概今日別室に陳列して置きましたから御覽を願ひます。一九二七年から一九三一・二年頃にかけて驚くべき勢で論述を發表して居ります。たゞ今次の戰爭始まつて以後のものは今なほ知る便宜がありません。これを通觀致しますと著書と名づくべきものは殆んどなく、僅に圖録の *les Grottes des Tonen-houang* 六冊とゴーチオとの共著ソグド語の *le Sutra des cau-*

ses et des effets du bien et du mal (善惡因果經) の譯述とが「中亞に於けるミッシェン・ペリオ」の一部として出刊されてゐると、ムール氏との共著の Marco Polo, the Description of the World の第三冊にマルコ・ポロの見聞録の註解を施したものが出る豫定になつて居る——もう既に出てゐるのかとも思うが自分はまだ見てゐない——位のもので、外には格別まとまつた著書はなく殆んどすべてが専門の學術雜誌の類に載せた論文であります。但しこれらの論文の中にはずいぶん長篇で、優に書物の體裁を整へ得るものも少くはありませぬ。例へば一九一一年及び一九一三年の亞細亞學會雜誌に載せたシャヴンヌ氏との共著 un traité manichéen retrouvé en Chine の如き、また一九二〇年に通報誌上に發表した牟子理惑論の研究の如きはそれでありませう。

その學風について少しく述べて見ませう。一體フランスに於ける中國を中心とした東方學の研究は、他の歐洲諸國に先立つて開かれたのであつて、これをペリオ教授の奉職した有名な Collège de France について

見ても、その最初の支那學の講座が開かれ、Abel Rémusat がこれを擔當したのは一八一五年——時はまさに前年エルバに流されたナポレオンが、その地を脱出してフランスに歸り、六月ワルテルローに敗北して没落の運命に陥つた年の正月で、その十六日に就任講演をして居ります。その後ジュリアン、サンドニ、シャヴンヌ、マスペローと相傳へて現在は大代目の教授となつて居る次第であります。かく早くから中國研究の起つたフランスに於て東方學の修得に精進したペリオ氏は、前述のやうに一九一一年明治四十四年にこの學院に創設せられた「中央亞細亞の言語歴史考古學講座」の擔當者となり、爾來歿時に至るまでその職に在つたのであります。講座の名稱にかゝはらずその中國に關する學術に於ける見識知識の高く深かつたことは、更めて申すまでもないことであります。その學問は社會とか經濟とか宗教とか美術とかいふ分野に立て籠つたのではなく、廣くそれらに亘つた文獻の考證學的研究が主たるものであつたと思ひます。ある人は彼を「中國とヨーロッパ・印度・イスラムとの交渉史の大

家であつた」といひ、またある人は「中國目錄學の大家であつた」と記して居りますが、共に間違ではないにしても、こうした範圍に彼の學問を限ることは氣の毒で、もつと廣い分野に亘る文獻學的研究に大なる成果を挙げた人であります。そうしてその特色としては、如何なる研究に於てもその知識が實に該博で且つ精緻を極め、その上にこの人に恵まれた特種の才能ともいうべき廣い言語の知識を縱横に驅使して、前人未發の天地を拓き、論述の仕方にも誠に整然たるものであつた點などを擧げるべきであります。由來フランスの東方學者の研究態度は、レミューザー以來傳統的にかゝる精緻な考證學風の特徴を有したもので、彼の師シヤヴンヌ氏の如きも、有名な史記の翻譯をはじめ、幾多の論文に於てよくこの特色を發揮して居るのであります。が、然も彼の學問は更にその間に群を抜いたものであることを、何人も承認せざるを得ないことと思ひます。前にも述べた敦煌出土の摩尼教經典殘簡の研究の如きはその適例であつて、凡そ中國に於ける摩尼教關連のことは細大とも委曲に互つて盡さざるなき有様

であります。尤もこの研究はシヤヴンヌ氏との合同に成るもので、兩氏ともに摩尼教に關しては早くから潜心研鑽を積んで居つたことであり、決して敦煌發見の殘卷を見出してから、新しく發足したのではないのであります。が、それにしてもかゝる精緻と該博と正しい見解とは、到底常人の企て及ぶところではないといはねばなりません。

我が國の東方學界を重視したことは、またその特徴の一として擧げなければならぬことであります。彼の天才的な語學の才幹は、いつの程にか日本文をも讀解するやうになり、我が國の東方學の成績をも知悉してこれを重視し、常に自から參照引用するばかりでなく、廣く世界の學界に紹介することに不斷の努力を拂つたのであります。尤も我が國のこの方面の成績を重視することは、必ずしも彼を以て嚆矢とするのではなく、前世紀末に故白鳥博士が烏孫考や匈奴研究などを發表して歐洲の學界に聲譽を擧げられたのを機縁として、漸くその注意を惹くことになり、シヤヴンヌ氏の如きもその論述中に屢々我が先輩諸氏の所説を引用し

て居りますから、彼は早くその師の影響を受けたこととは思はれますが、然もこの風潮は彼に至つて劃期的に顯著になつて、極東學院紀要や特に通報誌上に於て、我が國のこの方面の新著の解説紹介或は批評に勉めて居ります。有名なコルディエ氏のビブリオテーク・シニカの晩期の卷には、また往々我が國の近著を載せてありますが、それは概ねこれらの紹介に基いたものに外ならぬのであります。

かやうにして我が國の東方學はフランスに於て先づ甚だ尊重せられることになり、フランスの東方學者等はみなこの流を汲んで、例へばマスペロ・アツカン・ドミエヴィル・ガスパルドン諸氏の如きもその述作中に常に本邦學者の説を引用することを怠らないのみならず、これらの諸氏はみな我が國に來遊して、我が同學諸氏との間に密接な交友を結び、互に研磨砥厲するに勉めたのであります。獨りフランスに於てのみならず、この傾向はまた廣く歐米の學界にも及び、フランスに於けると同様の風潮を生ぜしめることになつたのであります。こんな風になつたのは無論我が東方學の

進歩發達に歸因することは言うまでもありませんが、然も前に述べたやうに歐米東方學の牛耳を執つたベリオ氏が、かゝる發達を認めて廣くこれを世界に紹介するに努めたのに依ることが大きいと言はねばならぬ次第であります。

我が東方學の成績を如何に熱心に彼が注意して居つたかは、私がパリに於てまた日本に於て彼と談論の間にも常に觀取したことでありますが、今こゝに彼の私に宛てた書翰の中の一節を引用して、これを證示致しませう。この書翰は一九三一年昭和六年十一月二十六日附けでパリから發送したもので、明年即ち昭和七年の初には日本に來遊して會談が出来る豫定であつたが、それを延期しなければならなくなつたので、書面によつて依頼する旨を述べ、日本の東方學關係の雜誌でその手許に缺號となつてある分を細かに書き上げて送附を頼み、その末に「かやうな面倒をかけて申譯ないが、然も日本の優秀な論著を引用し得ないことは、自分の甚だ遺憾とするところである。パリではこの外日本の貴重な著述も多くは缺け、例へば白鳥教授小川

教授に獻ぜられた記念論文集の如きも一冊も存しない状態である！」と記して、深甚の遺憾を表して居るのでもよく解ることゝ存じます。その日本文を讀みこなす力は勿論漢文を讀む力に比すべくもありませぬが、然もよくここまでに讀めたものと思はれる程に正しく解讀してあり、その才能と努力とに對して敬服を禁じ得ないのであります。かかる次第で我が東方學界の情況には遺憾なく通曉してゐたと見て誤りでなく、この點時には我が國內の學徒を凌ぐものがあつたというてもよいかと思はれる程であります。その結果として、長い間に互つて決しなかつた東方學の難問の一つが、歐洲に於ては彼に依つて始めて解決せられることになつた一つの事例を紹介致します。

前世紀の末から今世紀の初期にかけて續々として行はれた東西諸國の中國領中央亞細亞に於ける探檢が、諸種驚くべき結果を擧げて、學術の進歩に甚大の寄與をしたことは今更申すまでもないことでありますが、曾てこの地域に行はれ、後に全く滅絶して不明の状態となつた三種の言語を明らかにするを得るに至つたこ

とも、この探檢の擧げた偉大なる收獲の一つに數へなければなりません。その三種の言語といふのは、資料の發見後學者の苦心によつて解明するを得たソグド語・東方イラン語及びトカラ語の三つであります。ソグド語といふのはその當時の露領トルキスタン、今のウズベク共和國の有名なサマルカンドを中心にした一帯の地方を古くからソグドと呼ばましたが、その地の住民が早くから東西諸方を股にかけて商業貿易に従事し、その間に廣くこの地方の諸地に遺留した文献や、またはこの地方に植民した結果殘されることになつた文献に用ゐられてある言語で、十一世紀には既に殆んど亡んだ言葉であり、東方イラン語といふのは今の中國治下の于闐地方に行はれた古語で、トルコ族がここに住むに至るまでこの地方に據つたイラン系の民族の用ひた言葉であります。第三のトカラ語といふのは、その命名にも學者の大なる苦心が拂はれたもので、その經緯についてはあまりに複雑なので省略致しますが、トカラといふ地名は大體今のアフガニスタンの北、オクサス河の南、バルクを中心とした地方の名で

あります。このトカラ語の文献には A・B の兩種があつて、兩者の間にかなり相違はありながら、本來同一種語の方言的相違に過ぎないと見られて居ります。その中、まさしくトカラ語と呼べるべきものはその A 種に當り、資料の出土するのは、カラシナル即ち古くから焉耆と呼んだ地方と、ツルファン即ち古くから高昌と呼んだ地方の一部であり、そうしてこの語で書いてあるのは佛典に限られて居る。然るに B 種のもは焉耆・高昌の外、古の龜茲即ち今のクチャ（庫車）地方から多く出土し、佛典以外にも日用の言語として、例へば寺院の記録・通行免狀または壁書等にも用いられてゐる。この B 種の言語を何と名づけてよいかといふことが長い間に互つて喧しく歐洲の學者の間に論争されながら定まらず、この言語の研究の大家として有名であつたフランスのレギー氏やノルウェーのコノフ氏の如きもこれを何と名づけてよいか解らないといふに至つたのであります。尤もレギー氏は一九一三年に一度これをクチャ語と名づけたのであつたが、これに反對する人があつたので、その説を撤回し、生前これ本

に關する最後の論文にも、適當の名稱は不明であると述べたのであります。これより先きヘルリンのミュラー教授は一九一八年に Toxri und Kusān (Kūsān) と題した論文を發表し、ドイツの中亞探検隊の獲た回鶻（ウイグル）語の佛典の奥書三種を解説しました。その第一の奥書にはこの經の由來を述べて、Kūsān (Kūsān) の語から Barčug の語（トルコ語の義）に譯した云々、第二には 4 Kusān (Kūsān) の國に云々、第三には Kusān (Kūsān) の語から Toxri の語に譯し、Toxri の語から Türk の語に譯した云々と見えて居ることを述べ、そうしてその Kusān (Kūsān) Kusān (Kūsān)（かやうに種々の讀方をしてゐるのは、ウイグル字では E と F とが同一形で讀み別け難いので、特に括弧内の讀方を添附したのであり、s と s とは屢々混同されるが然も本來少しく字形が異なるので、それぞれ字形に従つて一と二では s と讀み、三では s と讀んだのであるが、三者ともに同一名を記したのであることは疑ありません）を、漢書西域傳を始め諸書に見える大夏（五翽侯の一つで、かの迦賦色迦王の

本地である貴霜 Kuei-shang 即ち佛教との關係に於て有名な Gandhara の境域、今の Kabul の谷間地方で昔 Kusan と呼んだ地名に當ると思はれると説き、東西の學界はこれに對して何等の異説をとなへるものもなく十餘年を経過しました。併し仔細に吟味すると、この論述にはそれ自體にある程度の矛盾もあり、また別にこの説を否定すべき證據も出て來たので、私はミユラー教授の所説に反對し、昭和五年（一九三〇年）に史學會の大會で「大月氏及び貴霜に就いて」と題して講演をした時にこの問題に論及し、更にその詳説を同年十二月、桑原博士還曆記念東洋史論叢に發表しました。その證據の要旨は、京都大學所藏のツルフアン出土回鶻文摩尼教徒祈願文の斷簡の中に、*qamli* 人某 *solmi* の人某、*küsan* の人某と書き並べ、これらの人々の冥助をマニ神に祈願したものがありますが、その *qamli* といふのは今の哈密 Hami また *solmi* といふのは、今はその名を残してゐないが、元代に唆里迷といふ字面で元史に現はれてゐる地に相違なく、その位置は元代の別失八里 *Beshbalıq* 近いところで、今の迪

化を去ること大して遠からぬ地と認められる。これら兩者と共に回鶻の摩尼教徒として記されてゐる *küsan* の人某の生地 *küsan* は、前記ミユラー氏の解説した佛典の奥書に見える *küsan* と同一であるが、これがこの地方から遠く離れたガンダーラ地方の *Kusan* の人であることは疑はしい。然らばこれをどこに當てればより適切に解し得るかといへば、自分は哈密や唆里迷と近接の地で、古く龜茲と呼んだ今の庫車（クチャ）、即ち十一世紀の Mahmud al-Kāshgarī の辭書にクチャの別名 *Küsan* と記され、元史や親征錄等に曲先 *k'ü-hsien* 昔先 *k'ü-hsien* 等の字面で記されてある地に當てるべきであると思ふ。なほ且つ回鶻で古の龜茲、今の庫車を *Küsan* と呼んでゐたことは、別に回鶻文の佛典の斷簡によつて明らかに證據だてられる。即ち自分の有するツルフアン出土の佛典斷片に「*küsan* の國に於て *suvarnapus*...と名づけた王の時」云々と見えるが、唐書西域傳によると、龜茲國に於て、唐の太宗と同時代の王の父に蘇伐勃駛（玄奘の西域記に金花王と譯してある）即ち *Suvarnapusa* とする王

があつたことが明らかで、この斷簡文書の王名はこれに當る。従つて龜茲は古きトルコ語である回鶻語では *Kusan* と稱せられたことは疑ない。それでかかる知識を以て前記のミューラー氏の解説した回鶻文佛典の奥書に對すると、その第一の「*Kusan* の語から *Bat'ug* 即ちトルコの語に譯し」は、「龜茲の語からトルコの語に譯し」たこと、第三の「*kusan* の語から *Toxri* の語に譯し、*Toxri* の語から *Türk* の語に譯した」は、「龜茲の語からトカラの語に譯し、トカラの語からトルコの語に譯した」といふことになり、従つて從來トカラ語のB種、即ちトカラ語の一方言で、古の龜茲焉耆高昌等一帶の地方に實用語として行はれたものを、何と名づけてよいか不明であるとせられたものは、明らかに *Kusan* 語即ち龜茲語と名づけて然るべきであるといふのが自分のこれら兩種の論文に於て述べた要旨であります。

私はかかる考を公けにした時に、この説は「歐洲の東洋學者の間に勢力ある説とは異つた見解を施したものである、……更に詳密な論證を加へてこの考を一層

確實になし得るか、もしくは翻然歐洲學者の説に追隨するか、それとも尙ほ別の見解を加ふべきか、すべてこれを他日に期せねばならぬ」と述べ、また「余の解釋の當否は、固より嚴正なる學界の批評に待たなければならぬ」とも述べ置きました。然るにペリオ氏は一九三四年の *Journal Asiatique* に *Tokharien et Koutchéen* と題した長論文を掲げて、その中にこのトカラ語B種の名稱について從來の諸説を一々批評し、レザール氏やコノフ氏が近頃の論文に於て「吾々は第一言語B種、即ちクチャにて話された言語に對しての古名が何と稱せられたかを知らない」と述べたが、それは彼等が私の既に日本語で發表した研究、そうして今日ではフランス文としても公けにせられてゐる研究を見逃した爲であり、この論文については、既に一九三一年の通報誌上に紹介したのであると前書きをして、以下すべて私のここに略述した所論を重ねて紹介して肯定し、A方言はトカラ語であり、B方言は *Kusan* (*Kisän*) 語であることを承認せねばならぬこと明瞭であると繰返して述べて居ります。

一九三四年以後の歐洲學界で、この問題がいかに扱はれてゐるかは、今の私の知り得ないところでありませんが、思ふに多分この論議によつて決定を見てゐることでありませう。果してそうであれば、ペリオ氏をしてこの問題に終止符を打たしめることになつたのは、彼が前述のやうに我が學界を重視して、常にその成績に深甚の注意を拂つてゐた結果に外ならぬと共に、言語の關係から、とかく世界に領會せられ難い我が學界の成績を廣く世界に紹介し、その注意をここに導くに至らしめた功は、吾々の氏に向つて感謝せねばならぬところと思ひます。これは單なる一例で、くり返して述べたやうに、我が國の先輩や同學諸氏の優れた研究の紹介に不斷の努力をしたことは、吾々の牢記せねばならぬところであります。その代りあまり出來の善くない著述に對しては、思ひ切つた辛辣な批評をあびせかけて障らず、よくその強い性格を發揮して居ります。

私の初めて彼と面接しましたのは大正九年九月私のパリを訪問した時のことでありますが、その以前から

文通してゐた關係もあつて、最初から舊知の如き交を結び、パリ滯在中の半年間、殆んど毎週往來を重ねました。その間に於ける彼の友情については、深い感銘を覺えて居ります。貴重なる敦煌文書の如きも、多忙な時間を割いて自分から國立圖書館に出かけて、いつでも閱覽の出來る便宜を計つてくれたのみならず、未整理でまだ彼の手許に在つたものは、どれでも希望するものを貸與して持ち歸ることを承知してくれたのであります。かの敦煌遺書に於て初めて原本の寫眞を世に傳へた慧超の往五天竺國傳の如きも、かやうにして借覽して私自身寫眞したもので、これに先立つて羅振玉氏が北京で一應寫字生に寫させたものが印行されてゐたのでありますが、誤寫が多くて據り難い本であり、藤田博士の同書の箋釋はその爲に氣の毒な誤に陥つてゐる點が少くないことは、曾て私の指摘したところであります。

前に述べたやうに、彼は幾多すぐれた才能を有して居りましたが、その外にもなほ非凡の記憶力と絶倫の精力とを有してゐたことを認めなければなりません。

之に加ふるにその書齋の有様を見ると、讀過した材料を精しくカードに取り上げ、自からこれを幾箱かのカードケースに丹念に整頓してゐました。ここに於てか研究に當つて資料の引用等、恰かも掌を指す如きものがあつたのであり、精細を極めた彼の論述の續々發表されたことも、誠に道理であると肯かれる次第であります。

今次大戦中、その消息は不斷に懸念してゐたのでありましたが、既に恰かも二年の前に鬼籍に入つてゐたのであります。まだ大して高齢といふ程ではなく、吾々はその俊敏と健康とに依頼して、なほ多くの名山の業を期待してゐたのでありましたが、眞に痛恨の至に堪へませぬ。今日本會最初の講演會に當りまして、彼の學業を讀へ、また我が學界に竭した功績を述べ、諸君と共に彼を追想致しますことは、惜しき彼の永眠に對する私のせめてもの心やりであります。長らく清聴を煩はしたことを感謝致します。

(昭和二十二年十月十九日東方學術協會主催
第一回公開講演會講演内容 文責在萩原)

昭和二十三年度京都大學文學部史學科 東洋史學關係講義題目

講義 東洋史概説 第一部(宋元時代)

研究 同 第二部(明清時代)

研究 五代の文化と庶民

研究 雍正帝とその時代

研究 東洋史上に於ける民族移動の問題

研究 家族制度を通じて觀たる漢代の社會

研究 中國古代社會史

研究 元明時代の西域

研究 敦煌發見唐宋時代民間文書の研究

研究 歷代食貨志

研究 中國農村社會史の研究

研究 演習(地理) 支那地理書の研究

研究 演習(國史) 朝鮮史通論

研究 演習(國史) 漢籍倭人傳研究

研究 演習(考古) ノイン・ウラ遺物の研究

研究 中國考古學

研究 (其他文學部東洋史關係講義題目は次の通りである。)

研究 支那思想史

研究 清未啓蒙思想

研究 抱朴子研究(九月以降の見込)

研究 (以下九〇頁下段に續く)

研究 重澤助教 二

研究 重澤助教 二

研究 重澤助教 二

研究 重澤助教 二

研究 重澤助教 二

研究 重澤助教 二

研究 重澤助教 二

研究 重澤助教 二

研究 重澤助教 二

(五七頁より續く)

演習 東塾讀書記

毛詩注疏

翁注困學紀聞

支那語學 支那文學

講義 中國目錄學

中國文學史

研究 中國目錄學

元人雜劇

中國小說史

演習 王力「中國音韻學」

漢書列傳

中國語學實習 A・B・C

語學 中國語初步

李太白詩

俞平伯「讀詞偶得」

馮友蘭「新原道」

重澤助教授二

平岡講師二

重澤助教授二

倉石教授二

吉川教授二

倉石教授二

吉川教授二

小川講師(三〇)

倉石教授二

吉川教授二

陳講師四

金子講師四

吉川教授二

倉石教授二

倉石教授二